へ13
3217

3217

近江國

金ゲ傳

古今著聞集巻之十相撲強力の部に曰、近頃あふみのくにはかの金ゲと
いふ遊女ありけり中略かりける程に甚須東国の武士■番にて上京せそ
此ものに日たく宿りけり馬ども湖に引きいれ洗ひ清めける程に件の梅さし
する馬のをどりけるが抱におどろきて走りまはりけるを人あまた取付て引とめ
けれども抱とも せびに引とめてもとりてはなさざりけるに此遊女はれあひぬと思もな
ろきてはるかもあらてたちきあり ぶ成きさきをひきとめまとりつきたりける馬のとも綱の
おどろきのかぎりにをもあらぶ抱どにあらくはなびきてうづまれてはなり
それより此金ゲ方の國えありて人おぢあつけるぶらいひるはとらぶ
ひるる男といまもあ六人にて六人まつぶでしとを自称しけるあはかな
ぶいどて五の丸指おとに号ぶせたり一どにたるせたり

前編

山東庵京山作

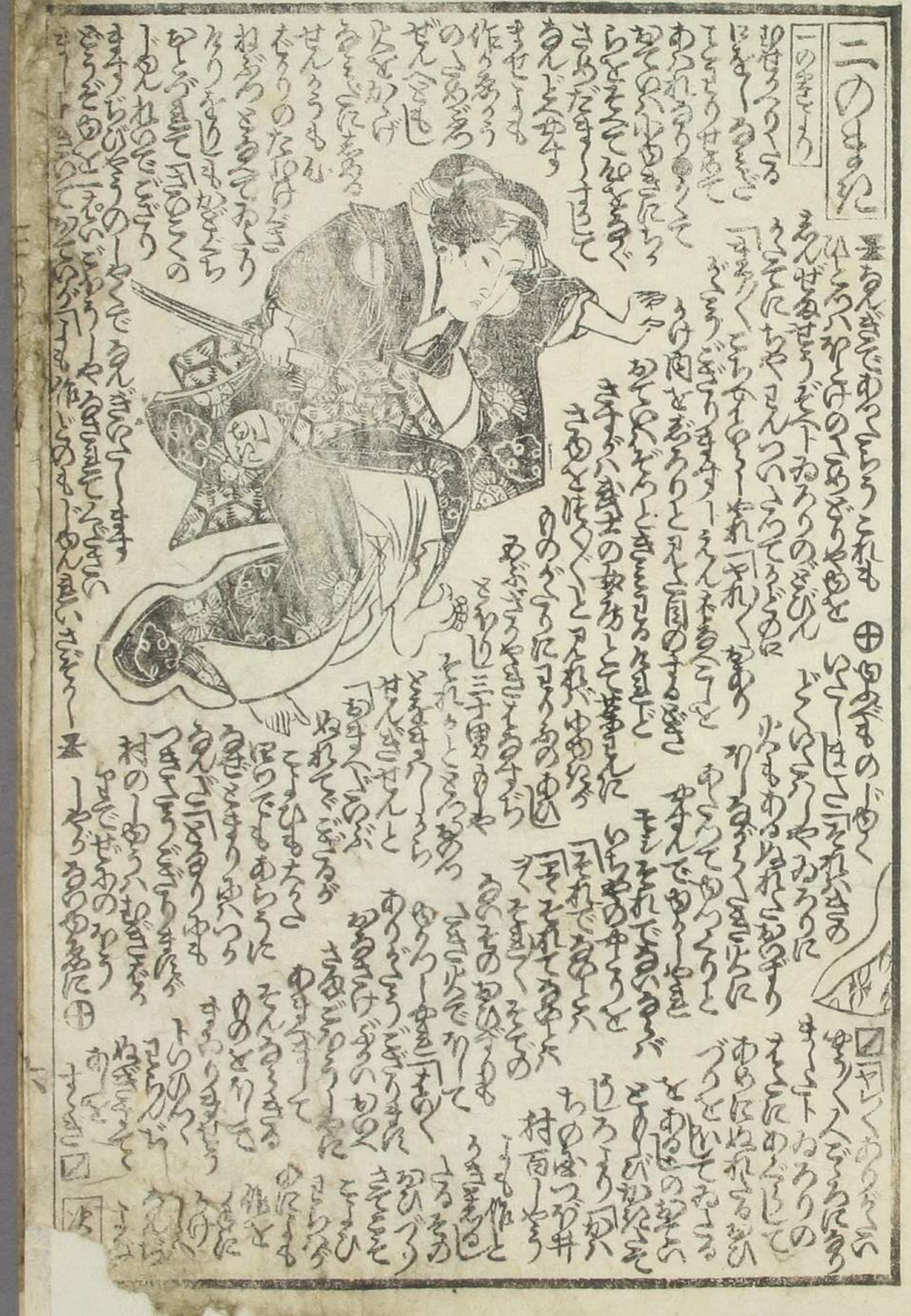
五渡亭國貞画

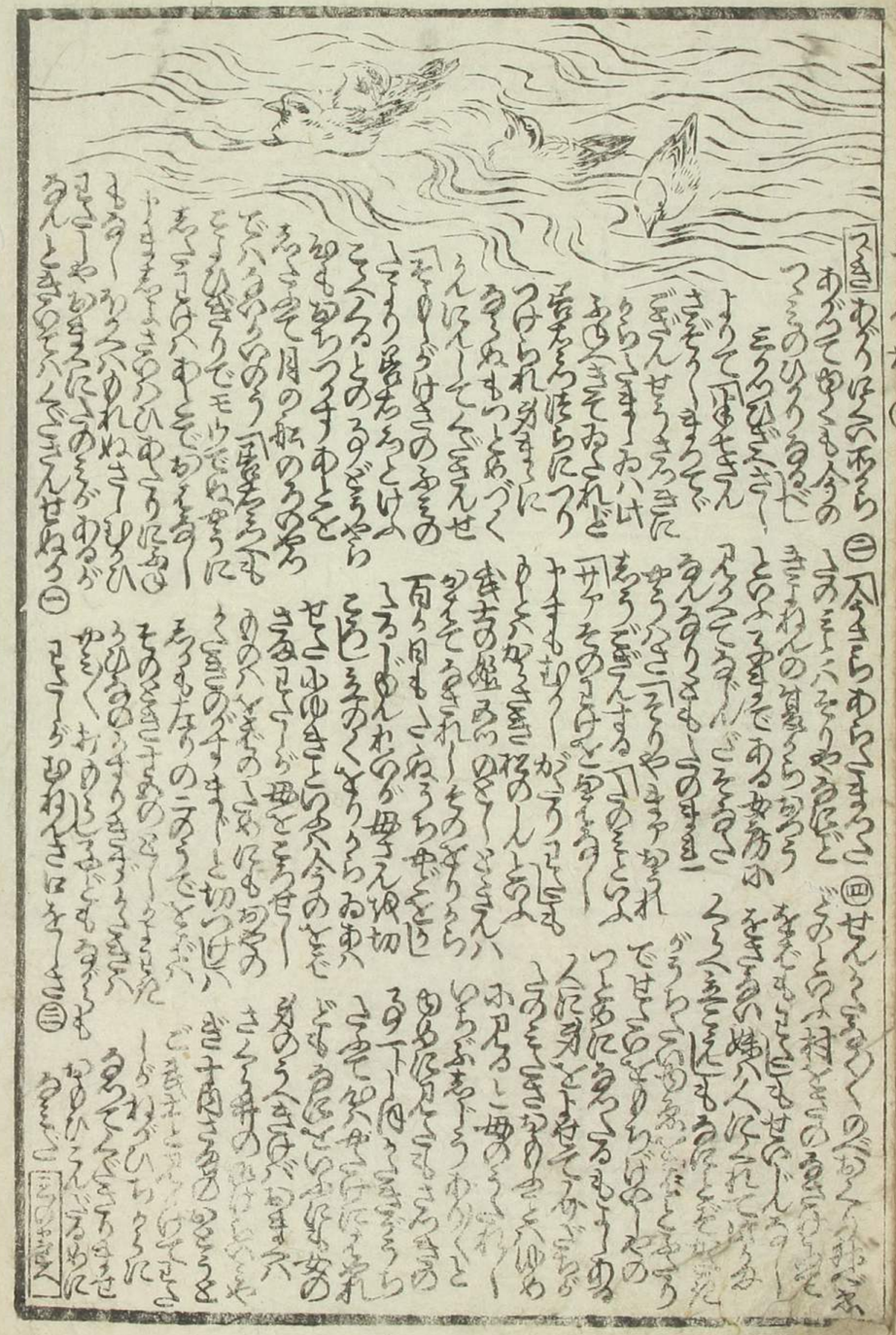
昭和 年 月 日 購求

遊女の姿
文政五年午ノ晩春
仝六未春
山東庵京山識
京山按ずるに此著聞集に
建長六年ノ序文あるを今文政
五年を考るに五百六十七年の
古書にして橘の成季が作なり
其時に名誉を得る
人の傳あまた
われど近
江の国
馬ひく
男
すさらす女
まてもよく
うれがひとつぶき
幸ろう金ぐ馬とぶらる
図と存ぜらる

二のまき

二のまき



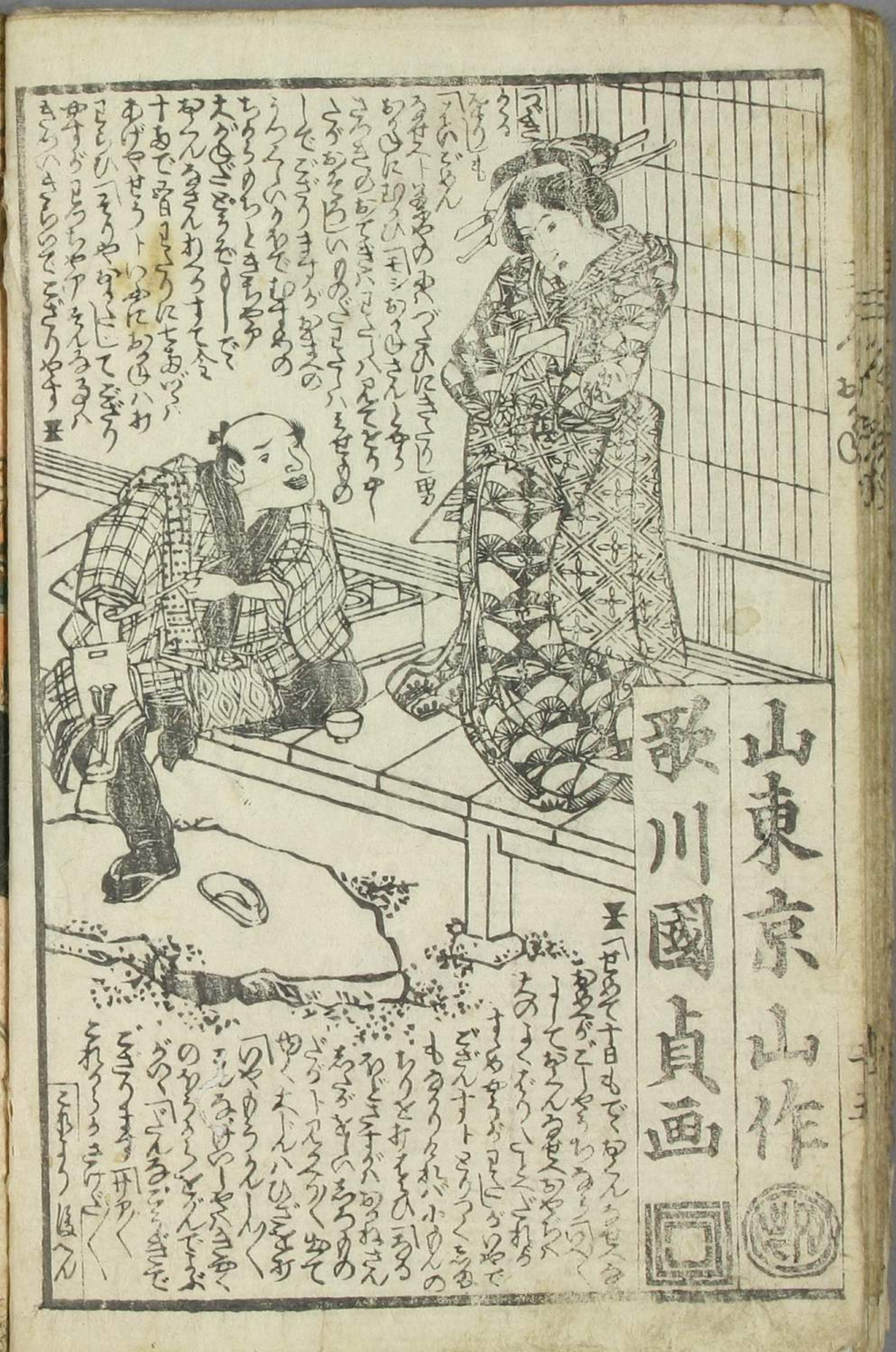


三のまき

善

八

文政六年
癸未肖月
江戸ヶ町川岸角
板主山本平吉


山東京山作
歌川國貞画

京山作　癸未の春

國貞画　榮久堂板

東海道中膝栗毛

後編

第四

後編之部巻之四

作者曰

▲女もらえる茶　懐妊丹一ぢく五文

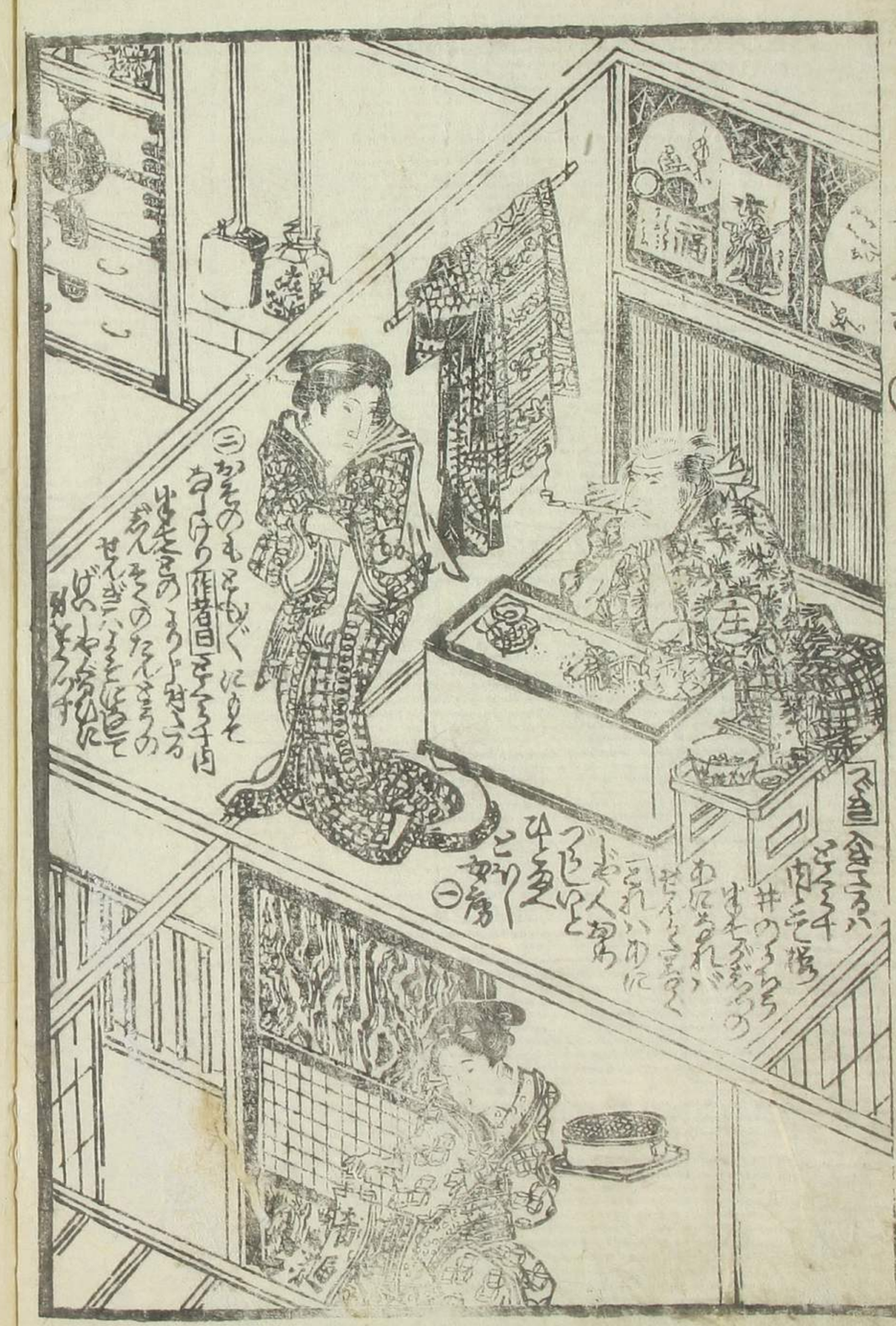
▲極上々旬入

○和漢印章考　京山著近刻

○古今食物考　同

雪

大入叶
九



善

雪
九

「こりやこれまぶくさうきんそくの
えんとう百めにうこさめりが
めぐりくてあれぞそ
もどろてこれバ百めハ
ごさうしゆの
わとぎすす
うつて
きさらく

▲骨董集 三編 京傳遺稿 京山補訂
▲女粧考 全三巻 京山百樹著 蘭

○三ろ左右をしと
おもひがけなう城
たちぎきする

つぎぜんたろべゑはけさんしさめ
うんさうこうらりやぎんそくの
さうとやらでいどぎんせぬうよいた
ものうの「あのうんそうハはどがよまと
ゐうぐにさうりうらゐのがやいろ
づゐ左右ゐうらいたろとして「おろやく
利ゐがあるうらいたろとろや「あのゐう
いくこゐる「今でいろいたろくきれ
ゐくくとすひそそれゐろうが
ちそうのさうぐきものちにくとひ
すてくはやくこをいくうる三ろハ
うんさうのはやくきろハなるぐ
ゐのとゐあて

○ゐのゐハはどやさうろのきハゐろが
ゐやのゐろゐ左右ゐうぐそうのゐろ
紳大ゐぐろこゐる手ちさゐりあろ
ゐやぐらひとせゐるぐきうら右ゐる
ゐのハさうろ「利ゐりそうたうびそく
ゐんのうをどぎんけなど「うんのうをハ
きくそゐれバ▲(一)上之

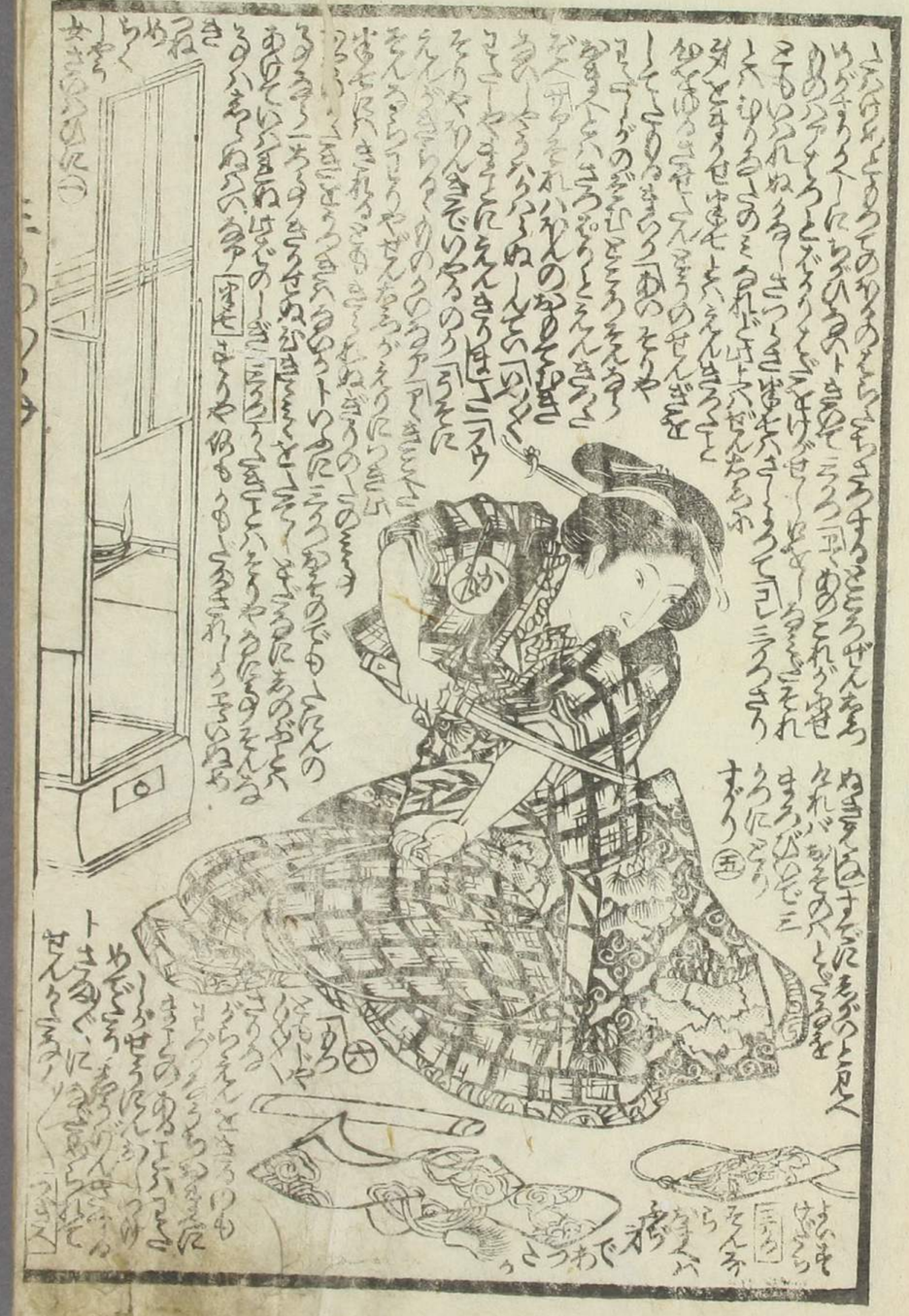
○まと
ろうが
ろうをを
よむ

ゐうぐにうのの「その馬が
ものうまをとうがそのうをうろ右ゐ
ゐやうをとうく
ゐうをれさゐのうん
ぐうトかやゐもカを
ろくをのハ女左カ
ゐうゐうりのうを
ゐのに出まへうを
左カくハゐうぐ
うをのうをきのて
ゐうぐをうこと
ゐけ「ゐれが
ゐのうをとて
ゐくうゐは
ゐのうを百八
うのゐうゐが
ゐぐうぐうゐの
ゐうをのゐれ
ゐうのうぐうゐ
ゐうぐにうをうをうをうをうをうを
ゐうぐうゐのゐうぐ
ゐうぐうゐのゐうぐ
ゐうぐうゐのゐうぐ

○三月八
ゐうぐが
ゐうを城
ゐうぐ
ゐうぐ
ゐうぐ

善

八



作者口上

内十
七
口上

山東庵京山作
五渡亭國貞画

○讀書丸一包壹匁五分

○十三味

○新形きせる

○京山てん刻

板元 山本
彫工 江川留吉
筆著 藍庭晋米

文政六癸未新板榮久堂稗史目録

柳亭種彦作
京太郎物語 操競三人女 全冊
一陽齋豊國画

墨川亭雪麿作
小栗屋半兵衛 常陸屋小稲 兩個妻姿嫐 全冊
哥川国直画

市川三升作
風俗女三國志 全冊
歌川豊國画

山東京山作
美濃屋三かつ 近江屋おつな 夢合寝物語 全冊
歌川國貞画

一陽齋豊国画圖
仮名手本 増補忠臣蔵 全冊
晋米齋玉粒補綴

恐ヶ岡常丸編
新撰 續商賣往來 全冊

美艶仙女香 一つゝみ四十八文
坂本氏

榮久堂 地本問屋
江戸よし町おやぢ橋角
山本平吉